

道真が神となり近江国比良宮において御託宣があり、その内容が「自分に思いを寄せるものがいればこれらの詩句を詠じるがよい」というのであったとの話である。このことに注目されたものに菅野禮行氏の論述がある。⁽¹⁶⁾

この『江談抄』中の詩句が道真の『菅家後集』の巻頭の作品「476自詠」と巻尾の作品「514謫居春雪」の第三・四句を指すことを踏まえて、菅野禮行氏は「託宣の真偽の程はともかくとして『江談抄』成立時に、早くもこのような話が存在していたのは事実である。それは「476自詠」の詩や、絶筆となった作品の最後の詩句に、道真の深い心を読み取るべきだと感じていた人々が、当時すでにいたことを物語るものである⁽¹⁷⁾」と述べておられる。菅野氏の学恩に拠りつつ、『菅家後集』の太宰府謫居時代の作品中、巻頭に置かれている「476五言 自詠」を改めて以下に取り上げてみる。

476 五言 自詠

離家三四月 家を離れて三四月

落涙百千行 落つる涙は百千行

万事皆如夢 万事皆夢のごとし

時々仰彼蒼 時々彼蒼を仰ぐ

通釈

- ・ 京都の家を離れてもう三・四箇月が経つ。
- ・ 涙がこぼれて百すじ千すじ頬をつたって流れくだる。
- ・ (人生の転変の激しさにあきればてて) 世の中の全てのことは夢と思うほかはない。